

この度、令和5年度兵庫教育大学連合学校教育学研究科同窓会研究助成が連合研究科同窓会研究助成選考委員会によって、以下2件の研究計画が採択されましたので、お知らせいたします。

(申請件数5件、採択件数2件)

申請者A (令和4年度入学・兵庫教育大学所属・社会教育連合講座)

研究計画内容 (研究期間：令和5年4月～令和7年3月)

1. 研究課題

ステレオタイプの弊害を回避する資質・能力を育成する地誌学習の授業モデル開発

2. 研究目的

本研究の目的は、初等・中等地理教育において、地理学等における場所概念を基盤として、認識の単純化・固定化・他者化といったステレオタイプの弊害を回避する資質・能力を育てる地誌学習の授業構成理論とモデル授業を開発し、実践を通してその有効性を質的・量的分析により検証することである。

わが国の社会科教育では、国内や世界の「地域的特色」の理解を主目的とする地誌学習が展開されている。そこでは、①「地域的特色」が指導者の恣意性や主観性に依存すること、②学習者が「地域的特色」を疑いのない事実として受容し、結果として子供の地域に対する認識を狭め、より強固なステレオタイプを生み出してしまうことが課題として指摘されてきた(草原, 2001; 中本, 2014)。これらの点に対して先行研究では、学習内容の吟味・精選や学習方法の工夫などにより、多面的・多角的に地域の理解をめざす地誌学習が検討されてきた。例えば荒井(2021)は、中学校地理的分野のアフリカ州を対象とした地誌的单元において、子供が持つ既存のアフリカ像に揺さぶりをかけられる統計や地図、写真資料を授業内で提示すること、地理学等の最新のアフリカ研究の成果を学習内容に組み込むことにより、認識の単純化を回避する授業を提案している。しかし、これまでの研究では単純化の回避が指導者による情報提示や学習内容の選定に依存しており、子供が、自分自身や様々な主体が捉えた「地域的特色」の傾向や偏りに気付き、その形成過程を分析しながら、その「地域的特色」の妥当性や課題を吟味する学習プロセスは保障されていない。子供を知識の構成者として捉えるのならば、様々な主体によって提示された「地域的特色」を子供自身が批判的・反省的に捉え、単純化・固定化・他者化といったステレオタイプの弊害を回避することのできる資質・能力を育成しながら地域に対する認識を再構成する地誌学習も求められる。

一方、学術分野、とりわけ地誌・地域研究では、地誌記述・分析における研究者の立ち位置や権力関係、「地域」の恣意性や自明性が反省的に検討されている。特に、近年の人文・社会諸科学で展開する場所論を踏まえ、場所概念の持つ動態性や多義性、構築性、重層性に基づいて「地域」を捉え、本質主義、他者化や二項対立的認識といったオリエンタリズムを乗り越えることをめざした地誌・地域研究が進展した(熊谷, 2019; 森, 2021)。しかし、初等・中等地理教育において、こうした視点を踏まえた地誌学習はほとんど検討されていない。昨今の緊迫する世界情勢や高度化するデジタル社会の進展を鑑みると、子供が、地誌の記述内容や「地域的特色」を見出す分析方法、自身や社会の持つまなざしを批判的に捉え、ステレオタイプの弊害を回避しながら他所や他者を共感的に理解することのできる資質・能力の育成は喫緊の課題である。そのため、近年の地誌・地域研究や場所論の成果を組み込んだ地誌学習の授業開発が求められる。

3. 研究方法

具体的な研究方法・計画は以下の通りである。

(1) 文献研究から、地理学及び関連諸科学における地誌・地域研究や場所論の研究動向および成果を整理する。

(2) 教科書・テキストブックの分析や先行実践に基づいて、わが国や地理教育先進国であるイングランドにおける地誌学習の特質と課題および場所概念の扱いを明らかにする。また、地域的特色の構築過程や他所や他者に対する自身および社会のまなざしを批判的に捉える資質・能力の育成に向けて、場所概念をどのように扱うかに関する内容的枠組みを設定する。

(3) 上記を踏まえ、初等段階でどのように場所概念を扱うのかを単元プランの形で提示する。

(4) 開発した単元プランを用いた実験授業を実施する。その有効性を量的・質的な効果測定により検証し、単元プランの改善を行う。

【主要参考文献】

荒井正剛 2021. アフリカのステレオタイプを避ける地理授業のあり方—中高連携によるアフリカ州の地球的課題の取扱い—. 新地理, 69(3) : 36-50.

熊谷圭知 2019. 『パプアニューギニアの「場所」の物語—動態地誌とフィールドワーク—』九州大学出版会.

草原和博 2001. 地誌教授による態度形成の論理. 新地理, 48 (4) : 1-17.

中本和彦 2014. 『中等地理教育内容開発研究—社会認識形成のための地誌学習—』 風間書房. 森

正人 2021. 『文化地理学講義—〈地理〉の誕生からポスト人間中心主義へ—』 新曜社.

申請者B（令和4年度入学・兵庫教育大学所属・社会系教育連合講座）

研究計画内容（研究期間：令和5年4月～令和7年3月）

本研究の目的は、望ましい未来を構想する資質・能力を育成する社会科教育理論を構築し、授業実践や教育現場に貢献することである。高等学校においては、平成30年の学習指導要領の改訂によって令和4年度から新科目「地理総合」、「歴史総合」、「公共」が実施され、生徒のより主体的な社会参画が目指されることとなった。こうした動きを受け、高校の学校現場では「思考力育成」型の授業が求められているが、「知識詰め込み型」の授業からの脱却は依然として課題となっており、教員の授業観の転換が乗り越えるべきハードルとなっている。

こうした課題克服のための打開策となり得るのが、「未来洞察」の研究理論である。本研究では、日本のみならず、海外に広く存在する学術基盤である「Journal of Futures Studies」などの未来学の研究知見も活用して理論構築を行い、授業実践と教員研修の両面から効果検証を図る。具体的には、令和5年度に①高校（もしくは中学校）の「公共」（公民的分野）の授業において未来洞察型の授業実践を行う。②申請者が主宰する「兵庫県高等学校『社会系教科』研究会」にて未来洞察ワークショップを開催する。

なお、①授業実践は副指導教員や本学博士課程に在籍する現職教員との共同プロジェクトの形で計画しており、②教員研修は研究会の150名を超える教員ネットワークを活用して対面・オンライン形式を併用し、時空間の制約を越えて幅広く、多様な教員に対応することをめざす。令和6年度においては、実践活動の分析を行い、「成果と課題」をまとめる計画である。